

昭和の南海地震体験談

氏名:永井 茂(ながい しげる)
生年月日:昭和4年1月20日
地震を体験した場所:由良町・自宅寝室
当時の家族状況:父、母、姉、弟、妹3人



1) 地震発生時の状況

当時17歳で漁師をしていた。自宅寝室で就寝中、強い揺れを感じ飛び起き、揺れが収まるのを待たず外へ飛び出した。大きな横揺れで1分位続いたように思う。風等は全くない日だった。

2) 津波襲来時の状況

地震＝津波の認識はなかった。父に「津波が来るやわからんさかい、お寺へ逃げい！」と言われ、お寺へ逃げた。父にはその認識があったのだろう。お寺の戸をトントン、トントン叩き、「開けてー！」と住職さんを起こし、戸を開けてもらった。その頃には、逃げて来た人が次々とお寺に上がって来た。母に家から米を持って来るように頼まれ、お寺の階段を降りて自宅に戻ろうとしたのだが、周囲の人に「そなん取りに行ったら死んでまうぞ！」と叱られ、お寺にとどまった。寒かったので境内で焚き火を焚いて暖を取った。「やけどをした」と泣く子供にも誰かが声を掛け、大勢の人間が気遣い合い、安否確認をした。出たり入ったりはあったが、境内には40～50人の人が集まっていた。3回目の津波が来た時には夜が明けていた。



3) 家族の行動・被害

足元も濡れない間に逃げられたので、家族は全員無事だった。津波が収まり、明るくなってから自宅に戻ると、家は倒壊こそしていなかったが、中は床上2m、梁まで浸水した跡があった。家財道具は流されずに済んだが、裏に置いていた油の入ったドラム缶は流失した。船も網の道具も全部流されてしまった。

4) 集落・周囲の被害

22、3人は亡くなったと思う。波止の真ん中が切れて、繋いでいた網船が流失した。夜が明

けてみると、大きな機帆船が陸に乗り上げていた。後に聞いたところによると、それにより被害を受けた家屋もあったそうだ。

5) 地震・津波後の生活

2、3日して周囲から打ち上がっている船の情報をもらい見に行くと、流された持ち船だった。傷んでいたのも、修理が必要だった。シラスやイワシを獲る道具は各家の印がついているので、見かけた人はすぐに教えてくれた。流された船は大きい船2つと小さい船2つがあり、全部見つかったが、破損しており、網などの道具も流されていたので、元の状態にして商売を始めるまでにひと月はかかった。

自宅の片付けをしながら、そこで生活をした。夜が明けたら畳を干し、その間に床を拭き、濡れた物を洗濯した。ドロや塩水で一杯になっていた。食べ物は水に浸かってしまったが、1週間もすると、湯浅から商人の定期船が醤油、味噌、米、酒などの食料品を運んで来たので、それを購入した。湯浅の船は難を逃れたのだろう。水は井戸水や打ち込みポンプの水を利用した。井戸水は塩水が入り飲めなかったのも、山手の良い水をもらいに行き、米などを焚いた。親戚や周囲の人に助けてもらい、一刻も早く商売を再開できるよう励んだ。

6) 次の災害への備え

家族で非難場所について話をしている。老人会や総会でも万一の時の対応について、区長さんが話をしてくれている。現在は非難場所に毛布等を用意してくれているので、特に何を持って逃げなければならない、ということはない。持ち出し袋には懐中電灯等を入れ、貴重品も用意しているが、いざとなったらそれらを持って行く余裕はないのではないかと考えている。地震が起きた時は広い道を逃げなければ危ない。狭い道は上から物が落ちて来た場合危険である。広い道の真ん中を逃げるというのが基本だ。